

姥神大神宮由来

◎伝説

いつの昔世か、折居おりゐ（或は於隣おりに）という姥うばが津花つばな（現江差町字津花町）の姥神大神宮古社地）に草庵を営み住んでいた。

折居姥おりゐうばは、天変地異を未然に知らせる事から、里人は、山野海辺四時の物事を、皆、姥の教えに従い、折居様おりゐさまと崇め奉っていた。

或る夜、神島かみじま（今のかもめ島）より光が草庵を照らすので、姥が不思議に思い尋ねてみると、白髪はくはつの翁が岩上に座し「汝が来るのを待っていた」と言つて瓶子びんし（壺の一種）を与え、「この中の水を海中に注げば、ニシン（鮭）と言う青魚が群来ぐんき（群がり来る）して、必ずや里人の生活を支えるであろう」と告げ、又、漁の方法を教えて焚火の煙と共に消えた。姥は教えられたままに里人に網を作らせ、瓶子の水を海中に注いだ所、海水が白濁してニシンが群来し、里人を飢えと寒さから救つたという。しかし、欲に眩んだ人々が、姥の言い付けを忘れ更に大きな網で漁をする様になり、その為にニシンが捕れなくなつてしまつたという。

現在、折居姥の神霊は姥神大神宮境内の折居社おりゐじや（安永三年（一七七四年）津花より遷宮）に祀られている。又、その時の瓶子は、古社地の沖にある岩（現瓶子岩びんしいわ）に變じたと。それは今に尚、伝説を物語るかの様にその面影を残している。

◎歴史

創立年代不詳。

後年、初代藤原永武（慶長年間（一六〇〇年頃））が、折居姥の草庵に天照大御神、住吉三柱大神、春日大神の御神体が祀られていたので「姥が祀つていた神」姥神うばがみと崇め祀る。その後、漁業、農業、林業、交易の発展と共に、年々渡島する者増加し、江差は経済の中心を為す様になり、産業、生活の守護神として民衆の尊崇を集め、心の寄り所となつたのである。

又、当宮は、松前藩代々藩主の篤い崇敬を受け、古くより北海開祖神、陸奥国松前一の宮とも称し、文化十四年（一八一七年）七月、第百十九代光格天皇御許、第十代藤枝政光を召され、正一位の神階、並びに大神宮号、敕額をも進められる。神職は代々豊後守、相模守に任じられ、又、従五位下に叙せられる。

姥神大神宮渡御祭とぎよさいは、正保元年（一六四四年）津花の地より現在地（旧地名、岩崎、現町名は姥神社に因む）への御神体渡御が始まりと云われ、又、最も古い神興みこしは、元禄七年（一六九四年）大阪で制作、四神旗の図像は初期のものに近い模様と考えられる。又、道文化財指定の神功山（人形は寶暦四年（一七五四）制作）、同じく松寶丸（舟形、弘化二年（一八四五年）制作）、蛭子山、豊年山（同じく水引はそれぞれ天明年間（一七八〇年代）制作）を始め、十三台の山車の神興供奉（神興のお供をすること）の形態は京都・八坂神社の祇園祭から取り入れたもので、北前船を通して伝わった上方文化の伝統的な信仰神事としてこの祭に引き継がれている。